

脳性まひ者への動作法における 初心者トレーナーの成長要因の実践的検討

——心理過程と援助技術に着目して——

南元 悠里¹⁾・石田 基起²⁾・小田 浩伸¹⁾

キーワード：動作法 初心者トレーナー 脳性まひ者 心理過程 援助技術

要約：本研究では、初心者トレーナーである第一筆者が脳性まひのトレーニーに対して動作法を実践したプロセスについて報告し、トレーニーの変容に伴う、トレーナーの心理過程と援助技術の進展について検討することを目的とした。分析するにあたって、筆者が作成したフィードバックシートに基づき、トレーニーに対して各セッションの身体感覚と援助技術に関する6つの項目について11段階で評価を求めた。また、その評価理由についてインタビューを実施し、分析した。その結果、初心者トレーナーは動作法を通して、困惑と葛藤、模索、共感・共体験による充実感の大きく3つの心理過程を経ていくことが示唆された。また、①指導教員による指導仮説の共有（トレーニーのからだに合わせた指導助言）、②指導教員による指導モデルの観察、③被援助者体験、の3つ要因がトレーナーの援助技術の進展に影響をもたらすことが推察された。

I. 問題と目的

全国の肢体不自由特別支援学校において、教員が自立活動の指導で活用している指導理論・技法は、「1位 動作法（31.3%）」「2位 理学療法一般（16.8%）」「3位 静的弛緩誘導法（9.5%）」「4位 感覚統合（9.1%）」「5位 摂食訓練（7.6%）」「6位 作業療法一般（4.2%）」「7位 音楽療法（4.2%）」であり、動作法が最も多く活用されていることが報告されている（姉崎，2019）。また、北川・内海・安藤（2020）は、肢体不自由特別支援学校における若手教員的意思決定に及ぼす影響を検討し、動作法の習熟度によって、学習者の身体の状態に合わせて柔軟に指導内容や教授方法を変更する教員的意思決定に差が生じることを報告している。このような、子どもの姿や障害をイメージすることが難しいことが予想される現状を踏まえて、教員養成課程の授業の一貫として、動作法を取り組んでいるといった報告もある（小

1) 大阪大谷大学教育学部

2) 兵庫教育大学大学院学校教育研究科

林・関, 2021)。つまり, 教員養成段階(特別支援教育)のうちに, 指導理論の一つである動作法を身につけておくことは, 特別支援学校教員における専門性や人間力の向上に一定の意義があるものと考えられる。

動作法は, もともと脳性まひ児の動作改善のため, 「意図-努力-身体運動」の一連の心理過程を「動作」と定義し, 努力の仕方の変容を目的とした援助方法として考案されたが(成瀬, 1973), その後の研究と実践によって適用範囲が拡大され, 現在では教育全般における発達援助法として, さまざまな教育の場で展開されている。大神(2000)は, 動作法の構造を共同注意の考えに基づき, 援助者の随伴的・相互的関わりによる「トレーニー(子ども)-動作課題-トレーナー(援助者)」の三項関係を成していると述べている。中でも, トレーナー側の援助のあり方の視点から, 研究が蓄積されてきている(重橋・大神, 1994, 福島・富永, 1995, 二宮, 2004)。重橋(1995)は, 動作法場面における熟練者と初心者の重度・重複障害児に対するコミュニケーション能力の比較を行い, 初心者は熟練者に比べ子どもの応答を促すことが困難であるという理由から, 子どもの応答を主観的に低く評価する傾向があると報告している。柳・森崎(2003)は, 動作訓練場面の援助者は「状態把握」, 「援助仮説」, 「働きかけ」という認知的プロセスにあると主張し, 初心の援助者は身体を介す働きかけを通して, 子どもの状態像を把握することが十分行われていなかったため, 援助仮説に困難を示していることを報告している。一方で, 田中(2003)は, 動作法の援助スキルが「見立て」, 「読み取り」, 「働きかけ」の3要素から構成されるとする田中(1998)のモデルの妥当性を実証的に検討し, 援助スキルが「省察的働きかけのスキル」と「見立てのスキル」からなる2因子構造であると主張し, 読み取りと働きかけが同一構造に包含されていることを報告している。この結果は, 援助者の認知活動と援助行為が概念上区別されるとしても, 実践場面では両者が密接不可分の状態にあることを示唆している。このように, 動作法は援助者の認知や援助といった側面から検討されており, 特に初心者トレーナーは独自の成長過程を辿ることが予想される。しかし, 初心者トレーナーが動作法を実践した事例の報告は多くない。また, 教員養成段階にある初心者トレーナーの動作法における成長要因を検討することは, 教員養成段階で動作法を取り組み始める初心者トレーナーを始め, その指導・助言にあたるスーパーバイザーに示唆を与えるものになると考える。

そこで本研究では, 教員養成大学(特別支援教育専攻)に在籍する初心者トレーナーである第一筆者が脳性まひのトレーニーに対して動作法を実践したプロセスについて報告し, トレーニーの変容に伴う, トレーナーの心理過程と援助技術の進展について検討することを目的とする。

Ⅱ. 方 法

1. 対象者

対象者は、地方公共団体に勤務する28歳の成人女性（Aさん）であり、動作法歴は約25年であった。3歳7カ月から、月1回心理リハビリテーション訓練会（以下、月例会）に参加し、初めて2泊3日の心理リハビリテーションキャンプ（以下、キャンプ）に参加した。4歳のときに初めて5泊6日のキャンプに参加した。大学入学まで、月2回月例会に参加し、ほぼ毎年3か所のキャンプに参加していた。大学進学後は、可能な範囲で月例会に参加し、2か所のキャンプにほぼ毎年参加していた。2020年7月から新型コロナウイルス感染症により参加機会が減り、月1回程度月例会に参加していた。

小学5年生の頃、左股関節に違和感があつて病院に行き、左股関節の亜脱臼と診断され、小学6年生の頃に手術を受けた。手術の影響で左右の脚に脚長差が生じていた。

コミュニケーションの面については、ことばでのやりとりが基本であり、からだの状態や感じたことなどを相手に伝えることができていた。

姿勢・動作面については、特に立位姿勢では、左股関節の亜脱臼と脚長差により、骨盤が左上がりになることで、右後ろ重心になっていた。また、上体は右前方向に前のめりになるようにして、からだ全体のバランスをとっていた。さらに、介助歩行では、手や腕に力を入れてからだを支え、足を一歩ずつゆっくりと前に出す様子が見られた。坐位姿勢では、股関節の緊張が強いことから基本は正座であった。

2. 期間

本事例は、第一筆者である援助者（以下、トレーナー）と対象者（以下、トレーニー）の1対1の形態で行われた。セッション中に、第三筆者である指導教員による援助方法に関する具体的な指導・助言を受けながら進めた。トレーナーの動作法歴は約1年であり、本トレーニーとは初めて動作法を行った。また、指導教員はスーパーバイザーの資格を有していた。

スケジュールは、1日につき1回または2回の動作法セッションを行い、大阪大谷大学3号館の保育室において、10月から12月中の3日間に、計5セッション行った。

3. 動作課題

主な動作課題の内容として、①躯幹のひねり、②坐位での股弛め、③立位での膝のまげ伸ばし、の代表的な3つの動作課題を取り上げ、実施した。

4. 分析方法

セッションの様子はビデオカメラにより録画し、以下の評価及び分析を行った。

(1) 動作課題におけるトレーニー及びトレーナーの変容：各セッション中の様子について、トレーナーがトレーニーとのやり取りの中で感じたことや心情、援助の工夫について、記述し分析した。

(2) トレーニーによる各セッションの身体感覚と援助技術の評価：筆者が作成したフィードバックシートに基づき、6つの項目について①自分のからだについて、②援助者と動作法をした実感について、③援助者に対する意識について、④援助者の援助技術（躯幹のひねり）について、⑤援助者の援助技術（坐位での股弛め）について、⑥援助者の援助技術（膝の曲げ伸ばし）について、10点を「良い」、0点を「悪い」として11段階で評価を求めた。また、その評価理由についてインタビューを実施し、分析した。

(3) トレーニー及びトレーナーの変容に関する妥当性：動作法におけるトレーニー及びトレーナーの変容の評価の妥当性を図るために、ビデオ映像を用いてスーパーバイザーの資格を有している2名の評定者（以下、評価者b、評価者c）に回答を求め、立位での膝のまげ伸ばし課題における変容の評価を行った。内容としては、順番を変えて第Ⅰ期から第Ⅲ期の動作法の立位での膝のまげ伸ばし課題でのビデオ映像を視聴し、初期（第Ⅰ期）・中期（第Ⅱ期）・後期（第Ⅲ期）への並び替えを行った。さらに、並び替えの結果に基づいて、筆者と各評定者の評価者間の一致率を算出した。一致率の算出は、筆者と各評定者とを一対一で比較し、割合をパーセンテージで示した。

5. 倫理的配慮

本研究を実施するにあたり、対象者に、本研究を実施する目的を口頭で説明し、承諾を得た。また、研究結果を紀要論文として公表する旨を説明し、「研究協力への同意書」への署名によって同意を得た。

Ⅲ. 結 果

1. 動作課題におけるトレーニー及びトレーナーの変容

結果は動作法（全5セッション）の経過をトレーナーのトレーニーへの見方や捉え方の変化を基に3つの時期に分けTable 1に示した。また、トレーニーの言葉を「」, トレーナーの言葉を『』, 指導教員の言葉を〔 〕にて示す。

Table 1 各時期の区分と概要

時期の区分	各時期の概要
第Ⅰ期 (#1)	援助方法や関わり方がわからず不安で、迷いながら関わっていた時期
第Ⅱ期 (#2-#3)	動作課題の理解とそれを実際に遂行するための援助方法を模索した時期
第Ⅲ期 (#4-#5)	動作法によるトレーニーとのやりとりを楽しめるようになってきた時期

第Ⅰ期：援助方法や関わり方がわからず不安で、迷いながら関わっていた時期（#1）

軀幹のひねり：初めてのトレーナーであったが、援助に合わせて一緒に力を抜くことができていた。トレーニーは横向きに肩を開いていくことが得意で息を吐くタイミングで力を抜こうと努力していた。しかし、トレーナーがトレーニーにどのように援助し、関わればよいか戸惑っていた。体側、肩甲骨あたりの緊張が強く、トレーナーが背中から腰にかけて手を当てながら緊張の強い箇所についてどこか聞くと、背中下部で「そこがきつい」という発言があった。上方向も下方向もトレーニーに合った援助ができておらず、どちらも注目して弛めることが難しい様子であった。トレーナーが体側を弛めるよう援助すると「気持ちいい」と言い、笑顔が見られた。反対の肩を下方向に弛める際、「もっと引っ張って大丈夫」と伝えており、トレーナーの援助がトレーニーに伝わりにくかったことが分かった。少しずつ力を抜くように援助し、力が抜けた時にはトレーナーが『そう』や『今弛みましたね』と伝えたことで、弛めた実感を共有でき、弛めた後には「気持ちよかった」と発言していた。評価項目①自分のからだについての評価においても、「トレーナーの援助があって弛めることができた」とリラックスセッションが進んだことがわかる回答があった。また、評価項目④トレーナーの援助技術（軀幹のひねり）についてでも、「課題の中で（軀幹のひねりの援助が）一番わかりやすかった」という回答があった。

坐位での股弛め：坐位での股弛めは股の緊張が強いトレーニーにとって苦手な課題であり、特に右方向に弛めることが難しい状態であった。トレーニー自身も右方向に弛めようとはしているが、からだは左方向に流れてしまい、「かたい」といった発言もあった。トレーナーは、援助の示す方向を変えながら何度も繰り返すことで、徐々に力が抜けていくのではないかと考え、何度も同様の援助を繰り返し行った。トレーニーは、難しいと感じる部分でもしっかりと課題に向き合い、じっくり時間をかけることで少しずつではあるが弛んでいった。

立位での膝のまげ伸ばし：立位姿勢は右後ろ重心で、上体を前のめりにすることでバランスをとっていた。トレーニーは正面を向き、トレーナーは後ろから右肩と左腰をたすき掛けのように援助を行い、膝のまげ伸ばしを行った。指導教員から左股関節に亜脱臼があるため、腰が

外方向に逃げないように止めておく必要があると指導を受けた。トレーナーの合図でまげ伸ばしを試みたが、トレーニーの上体を直姿勢にできず、からだが歪んだ状態でのまげ伸ばしになっていた。また、うまく伸びきることができていないにもかかわらず、トレーナーがトレーニーに対して『そう』と伝えると、反応はなく、トレーナー自身伸びきれていないと感じていた。このやりとりを踏まえて、指導教員から「Aさんのからだばかり見ている。Aさん自身を見ないといけない。」と助言を受け、指導教員の指導の下何度も立位での膝のまげ伸ばしを行った。しかし、トレーナーの援助方法に変化は見られなかった。また、トレーニーの事後インタビューから、立位での膝のまげ伸ばし課題について「タイミングが合わなかった」や「伸びあがるときにグラグラしていた」という語りを得た。

第Ⅱ期：動作課題の理解とそれを実際に遂行するための援助方法を模索した時期（#2-#3）

軀幹のひねり：#2では、利き腕である右側の肩から腰にかけて緊張が強く、肩を開く方向に示すと体側部分を指して「ここがきつい」とトレーナーに伝えており、何度か肩を戻そうと動かす様子が見られた。肩甲骨周りの緊張があったため、トレーニーの手を腹部に置き、肩甲骨を軸として開くよう援助した。すると、トレーニーから「肩に注目しやすくなった」とトレーナーに伝えていた。また、肩甲骨に手を添えるよう援助するとトレーニーは力の抜き方がわからなかったが、大きく力が抜けたときにトレーニーは「おー、嬉しい」と笑顔で発言しており、お互いが弛んだ実感を共有することができた。このことから、トレーナーはトレーニーとの関係性が進展してきていることを感じた。#3では、#2よりもスムーズに力を抜くことができるようになってきた。前回に続いて、手を腹部に置いて肩を開くよう援助し、その後肩を開く方向と体側部分を開いていく方向に示す援助を行った。特に、肩の力が上方向に抜けた時には、トレーナーから『そうです』と伝えると「おー」とトレーニーも反応することで力が抜けた実感を共有することができてきた。しかし、下方向にはなかなか力が抜けず、トレーニー自身どの部分の力をどのように抜けばよいかかわらず、トレーナーのことはがけに対しても反応が少なくなった。

坐位での股弛め：#2では#1同様、股を示しながら前・左右方向へ援助してゆっくりと弛めていった。トレーニーは、からだが弛んできたことで、左体側の緊張に気づき、右方向への弛緩が難しいと感じる様子が見られた。このことについて、左体側を指しながら「ここらへんが痛い」とトレーニーからトレーナーに伝えていた。トレーナーは、前・左右方向の援助を繰り返し行い、トレーニーが少しずつ力を抜いていくことで#1よりも弛めやすい状態であった。#3では、#2でからだ全体が徐々に弛んできていることで、前回よりも股を折って弛めることができており、お互いに#2よりも弛みやすくなったことを実感することができていた。トレーニーのからだを右方向に向けて、右股を弛める際、からだは左に流れてしまうが、トレーナー

がトレーニーのからだを支えながら行うことで、#1 よりも股に注目して取り組めるようになってきた。しかし、これまでのトレーナーの援助は、トレーニーの股をトレーナーの手で示すとともに、股を曲げる方向についてはトレーナーの上体で示していた。この援助により、トレーニーの姿勢が背中を丸める状態になっていた。このことから、より一層股に注目できる援助方法の工夫が必要だとトレーナーは感じていた。

立位での膝のまげ伸ばし：#2 では、右肩と左腰の援助を継続して行っていたが、トレーナーは伸びあがることを意識していたことから、トレーニーのからだを押し上げるように援助していた。このことから、左腰を下方向に援助できておらず、トレーニーからトレーナーに「伸び上がるタイミングで下方向にしてほしい」と伝えていた。また、課題姿勢をとった時点で後ろ重心になっており、伸び上がる際に重心が安定しなかった。トレーナーがどのように援助したらよいかについて、トレーニーとトレーナーでお互いのからだに触れながら何度も話し合い、腰を下方向に援助する工夫をしたことで、「今のがわかりやすかった」という発言があった。#3 では、右肩と左腰の援助をどのようにすればよいかをトレーニーとトレーナーで話し合いながら立位姿勢をとろうとしていたが、右肩と左腰の援助の力を均等にできておらず、重心が後方かつ右側になっていた。その後、指導教員からトレーナーが直姿勢にできていないことによるトレーニーのからだの歪みについての指導を受けた。その後、課題に取り組むと、#1 よりも伸びあがることができるようになり、トレーニーから「今のわかりやすかった」という発言があった。これにより、お互いに伸びあがることを共有できるようになってきた。また、指導教員からトレーニーに「(トレーナーの援助と指導教員の援助では)何が違う?」と聞いた際に、はじめは「わからない」と答えていたが、指導教員が伸びあがり方の違いについて聞くと、「(トレーナーの援助では)まだもうちょっと伸びそうな感じがする」と答えていた。

第Ⅲ期：動作法によるトレーニーとのやりとりを楽しめるようになってきた時期（#4-#5）

躯幹のひねり：#4 では、躯幹のひねりを行おうとした際、腰の緊張が強かったため、腰を中心に弛めた。側臥位姿勢で、上体を固定したまま骨盤を前に押し出す援助を行った。その後、躯幹のひねりをすると、はじめに肩を弛めようとしたときよりも肩が開きやすくなったことからトレーニー、トレーナーともに変化を実感できた。肩を開く方向を示す援助のみを行うと、これまでよりも肩を開いていくことができた。トレーニー自ら、首の向きはどうすれば力が抜きやすいのかをトレーナーに聞いてきた。そこで、肩を開く方向に首を向けるときの向きと向けないときの両場面でも肩を開く体験を行い、肩を開く方向に首を向ける方が力を抜きやすくなることにトレーニー自身で気づくことができていた。力が抜けた際に、トレーニーとトレーナーで言語化して伝えあい、笑顔で取り組む場面が増えてきた。事後インタビューにおいても「か

らだがかたくてどうしようではなく、トレーナーと一緒に力を抜く方法を探したらわかりそうという希望が持てた」という語りを得た。#5では、#4で、からだが弛みリラックスが進んできたことにより、トレーニー自ら肩を開く方向に弛めていくことができていた。また、トレーニーから「(力の) 抜き方がわかってきた」という発言があった。これまで緊張の強かった右肩でもスムーズに弛めることができており、笑顔が見られることが#4よりも増えた。肩を下方方向に弛めようと援助し、力が抜けるとトレーニーもトレーナーも笑顔になり、「下(方向に) めっちゃいける」という発言があった。トレーニーとトレーナーのからだの状態や感じたことをお互いに話し合いながら課題に取り組むことができた。

坐位での股弛め：#4では、指導教員から援助についての指導を受け、股を示しながら、膝で方向を示す援助を行った。これまで行っていた援助ではトレーニーが上体を前へ倒すような動きになっていたが、膝で方向を示す援助をすることによって股関節を屈曲させることが明確になり、トレーニーは股に注目して弛めることができていた。また、肩の力をトレーニー自身で抜くことが難しい可能性があると考え、肩の力を抜くことと、手を少し前に動かすことを繰り返し伝えた。すると、トレーナーのことがけに合わせて、トレーニー自ら手を前に伸ばし、上体の力を抜くことを通して、股を弛めることができた。#5では、#4で行ったトレーナーの膝で弛める方向を示す援助を行うことで、上体の力を少しずつ抜き、股を弛めることができていた。これにより、トレーナーも援助をすることに少しずつ自信を持って取り組めるようになってきた。トレーニーに援助が伝わっているかを聞くと、「伝わっているが、自分の股がかたいから前にいけない」と悔しがっていた。トレーニー自身、本動作課題に対する苦手意識はあるものの、「足のどこが突っ張っているか」など積極的にからだの状態を伝えるようになってきた。また、直姿勢になった際に、腰を起こして坐位をとることができていた。

立位での膝のまげ伸ばし：#4開始前にトレーナーがトレーニーの立位姿勢を再現し、指導教員から立位での膝のまげ伸ばし課題の被援助者体験を受けた。開始時には、#3同様、右肩と左腰の援助が均等でないため、重心が右後方になっており、スムーズに伸び上がることはできていなかった。このことから、指導教員から「左腰の援助が弱い。その援助ができることによって、トレーニーが伸びるための軸ができる」と助言を受けた。また、伸び上がる方向を示す援助について「引っ張るのではなく、方向を示す」という指導を受け、伸び上がる方向へ誘導するように援助すると、トレーニーが頷き、援助が明確になってきたことがわかった。また、トレーニーもトレーナーに対して援助方法の意見を言うことが多くなり、「(トレーナー)さんの援助はこっち(後ろ方向)に引かれている感じがあるけど、引くというよりめくる感じの方がいい」とトレーニー自身が求めている援助をトレーナーが理解できるように伝えていた。これにより、トレーナーは右肩と左腰を均等の力で援助できるようになってきたため、安定した膝のまげ伸ばしができることが増えてきた。#5のはじめは、伸び上がった際に重心が

不安定になり、姿勢が少し崩れていたが、徐々に右肩と左腰の援助が均等になり、安定して伸び上がることができていた。トレーニーからも「全然グラグラしない」や「(右肩と左腰の援助が) 両方の力が均等です」という発言があった。右肩を上方向に誘導する援助を行っていたが、トレーニーから「(トレーナーの援助の力が) 抜けすぎ」という発言があった。このことにより、トレーナーの手をトレーニーの肩から離すのではなく、トレーニーの肩に触れたまま力を抜いていくことで誘導する方向がトレーニーに明確に伝わるのがトレーナー自身わかった。また、伸び上がる際に右肩は上方向に誘導し、左腰は下方向に負荷をかける援助を行うことで最後まで力強く伸び上がることができた。前重心かつ両足で踏みしめて膝のまげ伸ばしを行うことができていた。

2. トレーニーによる各セッションの身体感覚と援助技術の評価

フィードバックシートに基づくトレーニーによる各セッションの身体感覚と援助技術の評価をTable 2に示した。

- ① 自分のからだについて：#1では、6点と評価しており、事後インタビューからもトレーニー自身トレーナーの援助によってからだのリラクセーションが進んだ実感があるという語りを得た。しかし、#2では4点と評価しており、事後インタビューでは「前回柔らかくなったところとかたいところがミックスされて、自分のからだが変わりにくくなった」と語っていた。#5では9点と評価しており、思ったことと動作がすぐ一致したことが嬉しく、自信につながった」という語りを得た。
- ② トレーナーと動作法をした実感について：#3までセッションを重ねるごとに評価は高くなっていった。しかし、#4では7点から6点に下がっていた。事後インタビューより、「からだがかたいからわかりにくかった。でも、前回までの体験が助けてくれて、うまくできていることがわかった。」と語っていた。
- ③ トレーナーに対する意識について：#1、#2では評価が6点と変化がなかったが、#3から高くなった。事後インタビューにおいて、#3以降トレーニーから「今回は一緒にできるという安心感や、今日は何ができるだろうという期待感があった。」や「安心して身をまかせられた」など前向きな表現が多くみられていた。
- ④ トレーナーの援助技術（躯幹のひねり）について：#1より#2は評価が高くなったが、#3で評価が低くなった。事後インタビューでは、「もう少し（力が）抜けるはずなのに抜き方がわからなかった」と語っていた。#5では9点と評価が高くなっていった。
- ⑤ トレーナーの援助技術（坐位での股弛め）について：#2から#5まで評価に変化がなかった。#3の事後インタビューより、「前よりも弛めやすくなったが、まだ一緒に弛めることが難しい」と語っていた。インタビューの回答において、トレーニーからの「難しい」という言葉

はあるがその中でも、セッションを重ねるごとに「だんだん（力の抜き方が）わかるようになってきた」という前向きな表現も少しずつみられるようになっていた。

⑥ トレーナーの援助技術（立位での膝のまげ伸ばし）について：#1 では事後インタビューより「こけるのではないかと不安になった」と語っていた。#2 から#4 まで 6 点と評価は同じであったが、「（トレーナーと）一緒に」という言葉もみられるようになっていた。#5 では、9 点と高い評価であり、事後インタビューでも「感動した」と語っていた。動作法場面でも「今のめっちゃいい！」という発言もあった。

Table 2 トレーニーによる各セッションの身体感覚と援助技術の評価

質問事項	#1	#2	#3	#4	#5
①自分のからだについて	6	4	7	6	9
②トレーナーと動作法をした実感について	5	6	7	6	9
③トレーナーに対する意識について	6	6	7	8	9
④トレーナーの援助技術（躯幹のひねり）について	6	7	6	7	9
⑤トレーナーの援助技術（坐位での股弛め）について	5	6	6	6	6
⑥トレーナーの援助技術（立位での膝の曲げ伸ばし）について	4	6	6	6	9

*表中の評価点は、10 点を「良い」、0 点を「悪い」として 11 段階で示す。

3. トレーニー及びトレーナーの変容に関する妥当性

データの信頼性を検討するため、本研究に無関係な評定者 2 名によって、第Ⅰ期から第Ⅲ期の動作法の立位での膝のまげ伸ばし課題でのビデオ映像を視聴し、並び替えを実施した。その結果、筆者を含めた評定者の一致率は 100% であった。

IV. 考 察

1. トレーニーの変容に伴うトレーナーの心理過程

トレーナーは、トレーニーに対して動作法を行うことで、一緒に動作法をできることが楽しいと感じるまでの心境の変化が見られた。この心理過程について、事例の経過とトレーニーによる各セッションの身体感覚と援助技術の評価項目①から③の観点により考察する。

第Ⅰ期では、トレーニーは、トレーナーの援助に合わせて力を抜こう・入れようと意識して努力する状態が動作課題中の様子から伺えた。トレーニーによる評価項目①から③において、5 点、または 6 点という評価であった。特に、事後インタビューでは、「トレーナーの援助があって弛めることができた」と語っていたことから、リラクセーションが進んだことが評価に表れていたと考えられる。しかし、トレーナーはどのように援助したらよいかわからず、戸惑っていた。なにができれば OK を出すのが不明確で、トレーナーとトレーニーで、できた

実感を共有することが難しいと感じていた。このことは、森崎（2002）が、初心者トレーナーなどは第Ⅰ期においてスムーズにやりとりを行うことができないためうまく関われないと述べていることから示唆される。特に、事後インタビューでは、立位での膝のまげ伸ばし課題において「タイミングが合わなかった」や「伸びあがるときにグラグラしていた」というトレーニーからの語りがあった。この結果より、トレーナーがトレーニーのからだのみに注目していたことで、トレーニーが努力の仕方を模索している過程を感じ取ることができておらず、援助のタイミングが共有されていなかったことが考えられる。また、この時期のトレーナーは、援助への戸惑いがあり、自信を持って援助できていなかったこともスムーズなやりとりを阻害する一つの要因であったことが考えられる。さらに、そのトレーナーの戸惑いは、援助の手を介してトレーニーに伝わったことで、からだを緩めることはできたがトレーナーと動作法をしている実感や意識の低さにつながっていたと推察される。

第Ⅱ期では、トレーナーはトレーニーとできた実感を共有できるようになるために、トレーニーに合った援助を模索するように取り組んだ。その中で、トレーニーとトレーナー双方が、できたことも難しいことも含めてセッション中にお互いの感じたことを話し合う方法を取り入れた。評価項目②では、6点から7点と高くなり、事後インタビューでも「躯幹のひねり課題で肩の裏側が弛みにくいことや坐位での股弛めで腰が張ることは前回わからなかった。今回わかったのはトレーナーの援助がわかりやすかったから」と語っており、互いの実感を共有できるようになってきたと考えられる。しかし、評価項目①は4点と低く、事後インタビューでは、「前回柔らかくなったところとかたいところがミックスされて、自分のからだがわかりにくくなった」と語っている。針塚（2019）は、目的動作を行おうとすると様々な部位に過度な緊張が生じ、目的動作の妨げになる不適切な動きが生じると述べている。このことから、これまでの努力の仕方ではからだを思ったように弛めることができず、トレーニーは努力の過程で葛藤していたことが考えられる。以上のことから、トレーナーは、トレーニーとの動作課題を通して、できたことを共有できるようになってきた実感を得たが、トレーニーの葛藤に気づき、向き合うことができていない場面もあったため、双方向による共同体験にまでは至らなかったことが推察される。

第Ⅲ期では、これまでトレーニーのからだの状態と努力における葛藤への理解が難しかったことを受け、トレーニーのからだの状態や得意な動きについてのアセスメントをさらに深めることが必要であった。そのため、セッション開始前にトレーニーの立位姿勢の再現と、指導教員から立位での膝のまげ伸ばし課題の被援助者体験を行った。加藤・二宮（2012）は、被援助者体験についてある程度動作法を経験したものが、援助する側になった際にトレーニーに共感したその過程を活かすというところで有効である可能性があると報告している。本事例の結果は、トレーナーはトレーニーの緊張状態や努力の仕方、からだの動かしやすさを理解し、ト

レーニーのからだの状態を肯定的に受け入れることにつながったと推察される。#4における評価項目①②は#3より低く、トレーニー自身、#4を実施した日はからだがかたいと感じていたことが動作法をしている実感の持ちにくさにつながったのではないかと考えられる。評価項目③は8点であり、事後インタビューでは「トレーナーと一緒に力を抜く方法を探したらわかりそうという希望が持てた」という語りがあった。このことから、からだがかたい状態でありながらも、トレーナーがトレーニーを受け入れ、一緒に取り組もうとする姿勢がトレーニーに対する意識を高めたものと推察される。#5では、評価項目①から③すべてにおいて9点と高得点であり、特に評価項目②のトレーナーと動作法をした実感についての事後インタビューでは「(トレーニーとトレーナー) どちらが動かしているかわからない感じがかった」と語っており、トレーニーはトレーナーと一体感を感じながら動作課題に向き合うことができたと考えられる。この一体感をトレーナー自身も感じつつ、トレーニーの能動的な動きや意図を読み取りながら援助できるようになってきたことが、自信を持って援助することへつながったと推察される。

鶴(2007)は、トレーナーは自分の手やからだの感覚でトレーニーのからだから伝わってくる動かしにくさを感知し、単に筋緊張がわかったという認知だけではなく、分からなかったことがわかった喜び、分かろうと努力したプロセスから生じる充実感、相手との協働の感じと共感など、様々な体験が伴うと述べている。この点を踏まえると、本事例においては、トレーナーは、①トレーニーと動作法をすることへの困惑と、トレーニーのからだの状態を理解する葛藤の時期、②理解しようと姿勢の再現と被援助者体験等を通した援助を模索する時期、③トレーニーのこころとからだを肯定的に受け止める重要性に気づくことで共感や共体験を実現し、一緒に動作法ができることが楽しいと感じた時期があったと推察される。本事例より、初心者トレーナーは、動作法を通して、困惑と葛藤、模索、共感・共体験による充実感の大きく3つの心理過程を経ていくことが示唆された。

2. トレーナーの援助技術の進展

トレーナーの援助技術の進展について、事例の経過とトレーニーによる各セッションの身体感覚と援助技術の評価項目④から⑥のトレーナーの援助技術の観点により考察する。

まず第Ⅰ期において、トレーナーはトレーニーに合わせた援助ではなく、これまでの自身の経験に基づく援助方法で課題に取り組んだ。トレーニーが課題に注目しづらい場面もあったが、力が抜けたときにはトレーナーが『そう』と伝え、トレーニーにからだが弛んだ実感を共有しようとしていた。評価項目④躯幹のひねり課題については6点、⑤坐位での股弛めについては5点であり、力が抜けた実感を一部伴っていることが確認された。また、事後インタビューにおいて、躯幹のひねり課題における援助が一番伝わっていることがわかった。評価項目

⑥の立位での膝のまげ伸ばし課題は4点であり、トレーナーの援助に不安を抱えながら援助を実施したことが要因であると考えられた。立位での膝のまげ伸ばし課題は、初めて行う援助方法への戸惑いがあり、トレーニーに対する援助が不明確であった。そのため、トレーニーの膝がうまく伸びていないにもかかわらず、トレーナーがトレーニーに対して『そう』と伝えると、反応がなかった場面や、トレーニーのからだのみに注目し、トレーニーを支えようと一方的に姿勢づくりを行い、姿勢が不安定になる場面があった。また、トレーナーは援助の意図が伝わっているかどうか、トレーニーに対して不安気に聞いており、援助仮説が曖昧であったことが考えられる。指導教員から姿勢づくりについて左股関節に亜脱臼があるため、腰が外方向に逃げないように止めておく必要があると助言を受け、セッション中に何度も援助を試行錯誤して行った。また、トレーナーのトレーニーに対する捉え方について、[Aさんのからだばかり見ている。Aさん自身を見ないといけない]と助言を受けたことをきっかけに、トレーナーはその助言の意味を考えるとともに、より良い援助方法や関わり方を具体的に考え始めた。以上のことから、トレーナーは援助方法を理解できていないことが、援助に対する不安感を増幅させ、トレーニーとのやりとりをより一層難しくさせていたことが推察される。

第Ⅱ期においては、即時言語フィードバックを行うこと、トレーニーと何度も援助方法についての話し合いを行うことを継続して行った。立位での膝のまげ伸ばし課題において、トレーニーとトレーナーでお互いのからだに触れながら何度も話し合い、腰を下方向に援助する工夫をしたことで、「今のがわかりやすかった」という発言があった。また、躯幹のひねり課題でも肩の力を上方向に抜けた時に、トレーナーから『そうです』と伝えると「おー」とトレーニーも反応し、実感を共有できるようになってきた。援助を通して感じたことを言語化したことで、トレーナーの援助にはよかったことや足りないことが明確になり、トレーナーの援助が少しずつトレーニーの求める援助へと変化し、お互いにできたと感じたことを表現するようになってきた。また、評価項目④から⑥すべての項目で#1より点数が高くなっていた。これらのことから、即時言語フィードバックと援助方法についての話し合いによりトレーニーとトレーナーのやりとりが活性化したことが推察される。一方で、指導教員がトレーニーと動作法を行うと、伸びあがったときに指導教員の「そう」ということばがけにトレーニーは笑顔を返し、お互いに成功したことを共有するように取り組んでいた。この指導教員とトレーニーの援助観察から得られた援助モデルを参考に、トレーナーは援助を試行錯誤したが、援助モデルをトレーナーは体現できなかった。以上のことから、やりとりの活性化は言語を用いたコミュニケーションによるものであり、援助技術の向上によるものではなかったことが考えられる。しかし、評価項目の得点が上がっていたことから、活発なやりとりを行う中で、より良い援助方法の模索に繋がったことが推察される。

第Ⅲ期において、トレーナーはトレーニーのからだの状態に合わせて援助することを意識し

て取り組んだ。トレーニーのからだの状態と援助方法の理解を図るために、トレーナーがトレーニーの立位姿勢を再現した。躯幹のひねり課題においては、腰の緊張が強かったため、まず腰を中心に弛めたことで、これまでよりも肩に注目して力を抜くことができていた。また、#5の評価項目④、⑥は9点と高得点になり、事後インタビューでは「思ったことと動作がすぐ一致したことが嬉しく、自信につながった」と語っていた。このことにより、トレーナーの援助はトレーニーの思いを汲み取った援助を行うまで向上してきたことが考えられる。しかし、評価項目⑤の座位での股弛めは、股の緊張が強く、トレーニーが苦手としている課題であったことが#5まで評価が変化しなかった要因であると考えられる。このことから、援助の変化を感じつつも、ほかの課題と同じような達成感を得ることは難しかったと推察される。また、立位での膝のまげ伸ばし課題において指導教員から「左腰の援助が弱い。その援助ができることによって、トレーニーが伸びるための軸ができる」と助言を受けた。また、伸び上がる方向への援助についても「引っ張るのではなく、方向を示す」と助言があった。この援助の強弱や方向などの細かい援助方法の助言により、トレーニーの求めている援助を理解し、トレーニーと一緒に伸び上がることへ意識を向けた援助を実現させたと考えられる。また、立位姿勢の安定に繋がったと考えられる。トレーニーとトレーナーが「今のよかった」と同時に発言することや笑顔が増え、トレーニーから「(右肩と左腰の援助が) 両方の力が均等です」という発言があるなど、トレーナーの援助技術の向上がトレーニーの身体的気づきを促したと推察される。

田中(2003)は、単に動作法を経験するだけでは必ずしも援助技術が獲得されず、援助者がどのような指導・助言を受けながら動作法を習得してきたかを再度見直す重要性を指摘している。本研究の結果と照合して言及すれば、本事例のトレーナーは、①指導教員による指導仮説の共有(トレーニーのからだに合わせた指導助言)、②指導教員による指導モデルの観察、③被援助者体験、がトレーナーの援助技術の進展に影響をもたらしたと推察される。一方で、本事例のようにコミュニケーションに問題がない脳性まひ者を対象とした場合、コミュニケーションにより援助や動作の意図性を一定程度共有でき、よりよい援助方法をトレーニーとトレーナーの双方で模索できたことも援助技術の進展に影響していると推察される。

3. おわりに

本研究では、初心者トレーナーである第一筆者が脳性まひ者と動作法をした事例を報告し、トレーニーの変容に伴う、トレーナーの心理過程と援助技術の進展について明らかにすることを目的とした。その結果、本事例の初心者トレーナーは、動作法を通して、困惑と葛藤、模索、共感・共体験による充実感の大きく3つの心理過程を経ていくことが示唆された。また、①指導教員による指導仮説の共有(トレーニーのからだに合わせた指導助言)、②指導教員に

よる指導モデルの観察、③被援助者体験、の3つがトレーナーの援助技術の進展に影響を与える可能性があることが示された。また、トレーニーとのコミュニケーションによって援助や動作の意図性を一定程度共有でき、よりよい援助方法をトレーニーとトレーナーの双方で模索できたことも援助技術の進展に影響していると考えられた。

本研究では、1事例による分析であったため、すべての初心者トレーナーが同様の心理過程や援助技術の進展に至るとは限らない。そのため、断定することは控えるべきではあるが、こうした初心者トレーナーの動作法の実践報告は、成長過程にある初心者トレーナーへの指導・助言の在り方などに示唆を与えるものであろう。そのため、さらに多くの初心者トレーナーの実践事例を収集し、分析していくことが必要であると考ええる。

付記

本研究は、第一筆者の卒論研究論文に加筆修正し、第二筆者を中心にまとめ直したものです。本研究を行うにあたり、快くご協力くださったAさんに深く感謝申し上げます。

文献

- 姉崎弘（2019）重度・重複障害児に求められる自立活動の指導理論・技法及び指導内容に関する調査研究－全国の肢体不自由特別支援学校への質問紙調査を通して－. 兵庫教育大学教育実践学論集, 20, 59-72.
- 福島亨・富永良喜（1995）脳性マヒ児への動作訓練における援助タイプと筋電図パターン. 特殊教育研究, 32(4), 1-9.
- 針塚進（2019）臨床動作法の基礎知識. 針塚進（監修）・遠矢浩一（編）, 臨床動作法の実践を学. 新潮社, 3-21.
- 重橋史朗（1995）動作発達援助場面での対人相互交渉における養育者側の要因－重度・重複障害児と関わる熟練者と初心者との比較検討－. リハビリテーション心理学研究, 22・23, 51-60.
- 重橋史朗・大神英裕（1994）重度・重複障害児に対する主動作援助の熟達過程. 九州大学教育学部紀要, 38, 2, 155-162.
- 加藤舞美・二宮昭（2012）動作法における初心者トレーナーの指導法について－態度と技術の側面から－. 愛知淑徳大学論集, 教育学研究科篇, (2), 79-93.
- 北川貴章・内海友加利・安藤隆男（2020）自立活動の個別指導場面における若手教師の意思決定プロセスの分析－動作法の習熟度に着目して－. 障害科学研究, 44, 149-159.
- 小林敏枝・関昌浩（2021）特別支援学校教員養成課程における「障害児臨床支援演習」の取り組みについて－特別支援学校との連携授業の実践－. 教育総合研究, 5, 207-215.
- 成瀬悟策（1973）心理リハビリテーション. 誠信書房.
- 二宮昭（2004）動作法のアプローチによる自閉性障害児のコミュニケーションの発達援助－子どもと援助者との「やりとり」の分析場としての臨床－. 愛知淑徳大学心理臨床相談室 紀要, 8, 15-21.
- 大神英裕（2000）動作学のための基礎理論. 成瀬悟策（編）, 現代のエスプリ別冊, 実験動作学, 至文堂, 28-37.
- 柳智盛・森崎博志（2003）動作法指導場面における訓練者の認知的プロセスに関する研究. 治療教育学研究, 23, 75-82.

田中信利（2003）動作法における援助スキルの構造. リハビリテーション心理学研究, 30(2), 31-38.

田中信利（1998）障害児の動作発達援助の規定因に関する一考察. 西南女子短期大学研究紀要, 46, 155-161.

鶴光代（2007）第12章－臨床動作法の学び方とメンタルヘルス. 臨床動作法への招待. 金剛出版, 184.